入谷地区を核とした農泊推進対策に係る仕組み

はじめに

「入谷地区を核とした農泊推進対策に係る仕組み」は、R3年度に開設した「入谷の里山活性化協議会」（以下、「本協議会」という。）が、R3 年度及び R4 年度の 2 年間で取り組んできた「農山漁村振興交付金事業」（以下、「本事業」という。）での検討・実践・実践を踏まえた改善等の取組みを振り返りつつ、その活動の中で見えてきた入谷地区のフィールド、取り組み、人々などの価値の再評価と成長を踏まえ、本事業終了後につながる入谷地区独自の農泊推進対策に係る取り組みの方針を整理するものである。

1. R3年度の反省と R4年度の実績

(1)R3年度の反省

R3年度の取組みを踏まえた反省点としては、各分野について下記の内容と改善計画が挙げられた。R4年度は主に下記の改善計画を念頭に置いて各分野の取組みを実施してきた。

分野	反省点	改善計画
食体験	竹皮弁当の販売と団体予約対応	期間限定販売 1,000 個×2 回（もみじ・春告げ）。改善計画に基づき実践する。
	入谷らしい食メニュー開発	地場産農林水産物 80%使用×郷土料理×気軽に体験＝食農育プログラムを確立する。
	ビーガン料理や精進料理などの開発	健康志向のニーズや教育旅行の目的に沿った対応を確立する。
農体験	農作業・収穫作業体験各種	大人数の農業体験ができる畑場の整備、指導者の受入態勢を組織化する。
	農事イベントの実践と継承	実践を通じて受入態勢を強化。若手の担い手＋「大学生サポーターズくらぶ」を確立する。
宿泊体験	よりハイレベルなワーケーション対応	コワーキングスペースの提案。入谷ならでは体験メニューの整備を進める。
	宿泊者のお散歩コース充実化	お客様が早起きして、自然豊かな里山を歩きたくなるような仕掛けをする。
新体験	ものづくりとチームビルディング体験	みんなで 1 つのものを作り上げるキットの開発と充実を図る。
	サウナやお風呂などの癒しプログラム	若者に人気のあるサウナや、健康志向のファスティングなどのプログラムを確立する。
フィールド管理	入谷地区の里山森林保全活動	童子山やひころの里、花見山を整備し、その活動を教育プログラムにつなげる。
	生業景調査及び整理	一次産業の営みが里山の景観を維持していることを再認識し、生業景コレクションを整理する。
地域イベント	主要イベントとのコラボレーション	秋まつり、マルシェなどの人が集まるイベントに参画して農泊事業を推進する。
	住民参加型運動の実践	入谷に来た観光バスに、入谷の住民がみんなで歓迎し、手をふる運動をおこす。
その他	インストラクター・コーディネーターの活躍	新たなプログラムの開発や実証実験などのインストラクター合同研修会を開催する。
	入谷地区の取り組みのブランディング化	各種実証実験を重ねブラッシュアップ。町や観光協会との連携を強化する。
	インターン生の提案プログラム実現	継続的な農泊事業を推進していくための学生ネットワークを活用した体制づくりをする。

（2）R4年度の実績

R4年度に向けて目標設定した改善計画に対する、R4年度の主な実績は以下のとおりである。

分野	反省点	実績
食体験	竹皮弁当の販売と団体予約対応	竹皮弁当：秋 1,001 個販売、春959個販売、教育旅行に合わせた竹皮弁当 254 個の提供達成、トレイル団体からの注文も受けるようになった。👉詳細2.（1）
	入谷らしい食メニュー開発	地場産農林水産物 80％使用×郷土料理については、里山ランチで達成されている。気軽に体験できる食育プログラムについては、ホットサンドやロケットストーブ活用による実証実験を展開しながら実施。👉詳細2.（1）（2）（6）
	ビーガン料理や精進料理などの開発	里山ランチメニュー内に、大豆ミートを使ったメニューや地域の山菜、黒米を使ったメニューなども開発。
農体験	農作業・収穫作業体験各種	大新たな農場整備完了、農体験イベントの実施。
	農事イベントの実践と継承	グリーンツーリズムインストラクター・コーディネーター研修受講者を中心とした実証実験イベントの実施。👉詳細2.（2）
宿泊体験	よりハイレベルなワーケーション対応	「まなびの里　いりやど」にワーケーション棟を増設し活用。
	宿泊者のお散歩コース充実化	R3年度の設置したお散歩コース看板を基に、宿泊客への宣伝を行い、実際にお客様がお散歩に出かけた。
新体験	ものづくりとチームビルディング体験	YES工房を中心にモノづくり体験プログラムの造成に取り組んでいる。教育旅行などの体験受け入れの積み重ねにより、受入態勢も進化している。独自に開発した「木育玩具ズレンガ」を活用したジェンガやドミノなどは、大人も楽しめるプログラムとなり、準備も容易にできるので、チームビルディングやアイスブレイク用教材としても大いに期待できる。
	サウナやお風呂などの癒しプログラム	童子山にハンモックを設置して、森林浴体験の実施。👉詳細2.（3）
フィールド管理	入谷地区の里山森林保全活動	地域団体との連携で、童子山及びその周辺の整備によって体験フィールドの拡充。👉詳細2.（3）
	生業景調査及び整理	木造の薪棚完成、炭窯の復活等。👉詳細2.（4）
地域イベント	主要イベントとのコラボレーション	「ひころマルシェ」「入谷・山の学校」等イベントの際にも、連携して宿泊客UP。
	住民参加型運動の実践	「まなびの里　いりやど」では、お客様が帰る際に、スタッフ（地域住民）総出でお見送りの取組みを実施。
その他	インストラクター・コーディネーターの活躍	新たにインストラクター輩出、プログラムの開発や実証実験なども実施。👉詳細2.（5）
	入谷地区の取り組みのブランディング化	入谷の夏・秋の収穫イベントウィークス実現、「入谷・山の学校」の継続見込み。👉詳細2.（6）
	インターン生の提案プログラム実現	コロナ禍ということもあり、学生ともあまり交流できず、R3年度に提案までは受けたものの、実践に向けては積極的な取り組みはできなかった。しかし、元々震災後から入谷地区が築いてきたさまざまな学校との関係性があり、毎年のようにインターンの受け入れも行ってきた実績があるため、今後はインターン生の提案プログラムを共に実践していく可能性が大いにある。

2. R3・4年度を経て見えたこと

(1)「里山ランチ」竹皮弁当のブランディングと期待

「里山ランチ」と名付けた竹皮弁当事業は、コロナ禍で来訪者が減ったことにより、飲食店や食事を提供していた宿泊施設が活躍できなくなってしまったことの打開策として、地域の地場産材を使い、地域事業者独自のメニューをテイクアウトで楽しんでもらおうという趣旨で始まった。

開始当初は、弁当販売をしたことがない事業者もおり、1 週間程度の限定販売とはいえ、慣れないことへの挑戦であったが、3 年ほど実施してきて、町内外への認知度が上がっただけではなく、提供者側も弁当提供に慣れ、積極的にメニュー開発や運営に関わるようになっている。それによって、関係者自らがこの取り組みを発信するようになったり、この取り組みを知る購入者が町内外に発信したりと、確実に「里山ランチ」がブランディングされて成長している。

また、町内においては、役場や社会福祉協議会、農協等がローテーションで発注してくれるようになり、町内他地区の人たちが入谷地区に関心を持つきっかけにも繋がっている。中には「全種類食べたい！」と毎日のように購入する人や町外から予約し受け取りに通う人も増え、食した感想を提供者へ伝えるなどの交流も広がっている。

R3 年度を上回る販売個数の達成と、教育旅行等のお客様への提供が実現したこの「里山ランチ」の取組みは、ニーズもあり、人や環境に優しい自然素材や地場産食材を使うという点でも教育的観点へとつながるため、地域活性化や人材育成につながる可能性がある。R3年度・4 年度の本事業の中で、人材・仕組み・ニーズ等々の条件が揃い、今後も事業として継続できるものとなった。

春と秋に取り組んできた「春告げ弁当」「もみじ弁当」に加え、今後は教育旅行や団体受入の際に、10 個以上から予約を受け付け、入谷地区の里山を楽しみながらいただけるランチとして定着させていきたい。

(2)農体験イベントの演出による可能性

R3年度は、単発の実証実験としてさつまいも収穫体験やりんご収穫体験を数回実施したが、R4年度は、主に農作業の盛んな夏と秋にかけて、計画的に収穫体験イベントを企画し、R3年度の取組みの中で開設した本協議会 WEB ページ「入谷の里山ねっと」も活用しながら集客活動を行った。

日付	内容
7/19,20	ヤングコーン収穫体験イベント
7/30	トヨタ遊休農地対策プロジェクト　蕎麦種まき作業
8/6,11	トウモロコシ収穫体験イベント
8/28,29,30	加工トマト”リリコ”収穫体験イベント
9/25,10/1,2	芋掘り収穫体験＆ロケットストーブ de 焼き芋を食べる会
10/15	里芋とごぼうの収穫体験＆新米とほかほか芋煮を味わう
11/19	柿の収穫と甘柿づくり体験＆ポップコーンを作って食べる会
11/26	冬野菜大収穫祭＆あつあつおでんを食べる会

収穫体験と言っても、単なる農作業体験だけでなく、収穫しながらの交流や収穫したものをその場でいただける美味しい食の体験、そして食するまでの調理に係る体験(例:入谷の炭で焼きとうもろこしをつくる/入谷の薪でお米を釜炊き、芋煮、冬野菜のおでんなどをつくる/ロケットストーブで焼き芋をつくる等)を絡めることを意

識した。それによって、アウトドア飯的な体験ができたり、薪調理体験を通じた森林資源の話などが大人も子どもも楽しめる学習へとつながった。実際、R4年度に実施した農体験は、どれも町内参加者と町外参加者が半々程度の割合で、親子参加や家族での参加も多く、リピーターも増えた。

このように、農体験イベントを収穫物のことに特化したものに留まらせるのではなく、地域理解や学びなどにつながるものとして企画し、そこに「交流」「おいしい」が加わる楽しそうなイベントに演出することによって、魅力的なイベントとなり、集客もニーズも上がることが分かった。

☝ヤングコーン収穫イベント、トウモロコシ収穫イベントではその場で採れたてを味わった。

☝秋の収穫イベントではさつまいも収穫や根菜の収穫体験を実施、親子参加も多く、リピーターも増えた。

☝さつまいもをロケットストーブで焼いて食べたり、地域の薪で新米や芋煮を作って食べる体験が大好評。

(3)海のまちならではの里山の特別感

本事業の一環として、R3年度に実施した広葉樹管理についての研修会を踏まえ、入谷地区のシンボルでもある童子山の広葉樹林を借りて、地域団体と連携した森林整備及び山に人が入る仕掛けとしてハンモックの設置を行った。

このハンモックについては、単に購入したハンモックを設置するのではなく「山から海がつながっている」ことを体感できるまちの地形や特徴に合わせ、町内の漁師と連携し、廃棄漁網を使って手作りしたハンモックを設置することにした。それによって、山に足を運びながら、山から海を眺め、ハンモックで海を感じるというゆるやかにストーリーがつながる体験として価値を持った。

実際に R4年度に実施したツアーの中の体験者からは、「山の中がこんなに気持ち良いなんて」「ここにずっといたい」「森が整備されていて気持ち良い」「いつも海に来ているから海から山は見えるけど、山から海が見えると雨水がどのように流れていくかもイメージできて発見」などの感想が出ていた。

豊かな海をつくることには豊かな森づくりが大切だということが定着している三陸沿岸部のまちだからこそ、海側だけでなく、山側からのストーリーをしっかり持つことによって、海のまちとしての価値もぐんと上がる、里山の役割が大切なことが伝わる、特別感のある体験が生まれるということを実証できる取り組みである。

(4)入谷地区の景色のポテンシャル

R4年度には、グリーンツーリズムのツアー開発として「山の神平地区パワースポットツアー」と「童子下地区フルーツロードツアー」を企画・実施した。
山の神平地区については、以前からパワースポットそのものは訪れる人も多かったが、スポットで見て終わってしまうことも多かったため、周辺での収穫体験や住民との交流、「校舎の宿　さんさん館」等の拠点を使った食事等を組み合わせてツアー化した。パワースポットの一つである巨石は、見た目のインパクトも大きく、他にはない唯一無二の景観が楽しめるが、そこに至るまでの里山の景観も、地域の人に案内してもらうことで、水汲み場があることや人知れず守られている神様がいることなど、暮らしや文化を感じることができ、愛着の湧く景色が多い。

童子下地区は、地域のシンボルの山である童子山に向かうまでの坂道が主なエリアである。元々果樹農家がいたものの、この数年でＵターン・Ｉターンによる耕作放棄地での果樹農家が一気に増えたことを受け、この坂道を「フルーツロード」と内輪で呼び始めたことをきっかけに、入谷地区の新たなツアースポットとして盛り上げたいと開発した。このフルーツロードについても、先に挙げた農体験のように、ただ単に果樹の収穫についてのみの体験ではなく、果樹について触れながらも、童子下地区の暮らしや言い伝え、景観などを楽しみながら最終的に童子山まで向かうことができるツアーとしており、ゴール地点では設置したハンモックで休むことができるという設えになっている。

このように、入谷地区の景色は、自然の雄大さや荘厳さを感じられるようなスポットがありつつも、そこに至るまでの動線も、歴史文化や暮らし生業を解説しながら歩くと十分に発見があり、愛着が湧き、あたたかく感じられる景観に溢れている。

R4 年度は、I ターン・U ターンを含む若者たちと、地域に長く暮らす人たちとで協力し合ってこのツアーを企画・実施したことにより、この美しい里山の景色のポテンシャルの高さを改めて再認識することとなった。それを踏まえて、地域で活動する団体による薪棚設置や炭窯づくりなどの展開の際も「生業景」を意識した景観づくりに取り組んだ。

☝童子山の枯れた栗の木で作った薪だなと杉で作った誰でもベンチ。　☝童子下に設置したドラム缶炭窯。

(5)若者や移住者の成長と実績

主に(2)～(4) については、本事業を通じて入谷地区の活性に関わっていきたいと思うようになった若者や移住者が主となって企画している。特に、R3 年度及び R4 年度にグリーンツーリズムインストラクター・コーディネーターの研修を受講した者たちが、資格取得後、自発的に「自分たちで企画したい！」「入谷地区を盛り上げたい！」と視察研修を希望し、実際にツアーや体験プログラムの開発・提供に携わった。

視察研修では、実際に農業を通じて入谷地区を盛り上げたい 2 名と、コーディネーターとして地域の活性化に寄与したい 1 名が共に話し合って希望した場所へ研修に行き、持ち帰って参考にできるようたくさん質問や意見交換を交わし、実際にインストラクター・コーディネーターとして活躍されている方々の体験を受けて、体験者側の視点を養うなどをした。(詳細は「GT 静岡研修報告書」参照。)

☝キウイの観光農園視察。　☝わさび農園でインストラクターの動きを体感。　☝コロナ対策も始動を受ける。

夏にもヤングコーンやとうもろこしの収穫イベントは実施していたが、9 月に視察研修をしたメンバーを中心に「帰ってすぐにまた何か実行したい！」となり、秋には毎週末連続で体験プログラムを企画開発し、その他のインストラクター仲間たちと共に実施したのが、秋以降の(2)～(4)の取組みでもある。

自分たちで企画し、実行までをやり切り、その際の参加者の反応や評価を受け、この仲間たちで今後も入谷地区ならではのグリーンツーリズム企画をしていきたいとモチベーションが上がっている。本事業を経た「入谷地区を核とした農泊推進対策に係る仕組み」として重要な役割を担う存在である。

(6)時代に合った里山の向き合い方の提案

R3年度及び R4年度に地域から排出した研修生たちが着実に力を付け、入谷地区の賑わいに寄与していることで、今後に期待する地域住民も増えている。移住者や若者を含む、グリーンツーリズムの新たなインストラクター・コーディネーターたちが、地域の先輩たちと共に協力し合って企画開発をしていく中で、多様な視点から入谷地区の体験プログラムやツアー開発について検討された。その中で、入谷という地区が持つポテンシャルや活躍する人々の取り組みを踏まえ、昨今うたわれる「SDGs」「サスティナブル」「エコ」「ワーケーション」などのさまざまなキーワードと、「農泊」という取り組みが、入谷地区で最大限に活かせる組み合わせについて考えるようになった。

そして、閑散期になる冬(主に1、2月)にも何か企画できないかと地域からの期待もあり、屋外でのアクティブな活動がしづらいこの時期だからこそ、単に「体験できる」「学べる」「楽しい」だけでなく、これからの時代に求められるさらなる「生きる力」「価値観」「伝承」などを意識した、原体験から成長していけるような企画を提供していきたいという思いで企画を検討した結果、「第1回入谷・山の学校」を企画し、開催した。

企画の趣旨としては、タイトルとおり「学校」に見立てて科目に分けた授業を実施していくのだが、例えば初日に実施した「体育」の薪割りも、昔の暮らしの中で使われてきた身体の動きや筋肉、持久力、それが無ければ暮らしが成り立たなかった時代の背景などについて、身をもって体験することで考えるきっかけにしてもらうことにつながっている。また、災害時などに役立つエネルギーの作り方に結びついて欲しいことなどの意味が込められており、その後の「国語」の時間では、薪を使って火を焚いて囲炉裏を囲ったり、2 日目の「家庭科」として行ったピザづくりも、枝葉を使ったロケットストーブで焼く体験としたため、実際に山にある資源からエネルギーにして暖をとったり食事をする体験をした。この企画から、参加者たちからは、次のような感想が出ている。

☞11月に毎週末実施した入谷の里山を楽しむイベント宣伝(「入谷の里ねっと」より)。

☞「第1回入谷・山の学校」のチラシ。

- 企画を通じて「山」が決して「業」だけのものではなく、ハードルの高いものではなく、本来生活のそばにあったさまざまな大切なことに気付かせてくれる充実した時間だった。
- 地域活性化やグリーンツーリズムを超えて、私たちが見直すべき「豊かさ」を再考するような、サスティナブルな世界づくりの一助となる企画だった。

町内外から参加し、交流も生まれ、すでに第2回をやろうという方向性で盛り上がっている。このように、今後は感光やレジャーとしてのみでなく、時代に合った里山ならではの学びや体験を提供していく演出を検討し、地域の資源や人材や魅力を最大限に発揮していける取り組みが重要である。(詳細は、「IRIYAMA 実施報告書」参照。)

イベントの様子(薪割り授業、山の民話を聴く授業、森の香りのスプレーやバームづくり授業、地域の歴史文化を学ぶ授業、地域の木で木工授業、ロケットストーブでピザづくりの授業)。

また、R4年度に「まなびの里　いりやど」で増設したワーケーション棟が、上記イベントでも座談会会場として活躍しただけでなく、宿泊者のワーケーションをサポートする設備として機能したり、「YES 工房」で展開している木育玩具「ズレンガ」の実践会場としても活躍している。町外から訪れた参加者からも「このような設備があれば、季節の良い時期には日中里山で有意義に過ごし、夕方から仕事をするというスタイルも可能だと好評を得た。このように、入谷地区が提供できる「豊かさ」を提案しながらも、仕事と両立していける環境提供もセットで行うことで、気軽に里山の暮らしを体験してもらえることを目指し、今後も展開の可能性があるだろう。

R4年度に完成したワーケーション棟の外観及び内部の様子。

「ズレンガ」の体験実施の様子。

3. 入谷地区を核とした農泊推進対策体制

(1)「入谷地区を核とする」の定義

「入谷地区を核とする」というのは、決して入谷地区のみで地域の活性化を図ろうとするのではなく、南三陸町というまち全体から見た入谷地区の特性を活かし、入谷地区から提案・提供をしていくことで町全体の活性化に寄与していくような農泊推進をするという意味合いとする。

南三陸町の豊かな海へ流れ着く元となる山側での暮らしを紹介し、なおかつSDGs等うたわれる昨今だからこそ見つめ直すべき豊かさの提案をすること、地域に根付き教訓でもある豊かな歴史文化を共有することで地域理解を深めること、震災時も南三陸町のハブ拠点となったことから震災学習の理解を深めることなどにもつながっていくことを目指す。そういった里山から海のつながりを展開していく方が、この入谷地区の価値をさらに高めることにもつながると考える。

南三陸町の観光協会は、周辺自治体に比べて、比較的推進力があり評価されている。南三陸町観光協会としても、全面的に「海とともに、生きるまち。」と掲げて取り組んでいるが、震災当時ハブ拠点となって沿岸部を支えた唯一の内陸地である入谷地区の重要性も、町民であれば分かっている。だからこそ、今度は、南三陸町を理解するうえでも実は重要なハブ拠点である入谷地区として、海を目的に訪れる来訪者に、南三陸町の理解をさらに深めてもらうことができるプランを提供することで、町としての観光の価値をさらに上げていくとに寄与していく。

（南三陸町観光協会 HP より）

(2)「入谷地区を核とした農泊推進対策体制」3つのポイント

1. 地域の各分野が集まり考える農泊推進対策に取り組む場づくりの継続・強化
2. 人材育成も兼ねたグリーンツーリズム推進チームを確立
3. 南三陸町観光協会と連携した里山の価値化と窓口・情報・開発の一本化

① 地域の各分野が集まり考える農泊推進対策に取り組む場づくりの継続・強化

本事業を通じて分かったことは、例えば「里山ランチ」事業を実現させるための体制や仕組みも必要であったし、本事業を通じて作成した体験パンフレットや「入谷の里山ねっと」のような HP も重要であったが、そういった個々の取組みの仕組み作りはそれぞれ強化しつつも、仕組みの構築以上にそれらを推進していくための「場づくり」の方が重要であったということだ。それも、ただ会合を開けば良いということではなく、次の要素が重要だと考える。

- みんなが意見を出し合い、提案できる話しやすい場づくり
- 若者や移住者も地域のプレーヤーとして認められている空気が漂う場づくり
- 各々が感じている課題を出し合うことができる雑談の場づくり
- 真面目な会合だけではなく、オフ会のような交流重視の機会もある場づくり
- 会合以外にも、関係者同士が体験に参加してその体感をシェアすることができる実験の場づくり

仕組みそのものを構築するというよりは、フィールド開発や企画開発に向けて、毎年本協議会が音頭を取り率先して呼びかけ、なおかつグリーンツーリズム推進チームによって具体的な体験として開発していくことで、地域内交流と人材育成のサイクルも常に動かしていくことが、農泊推進対策に係るアクションを起こし続けるために必要なことである。そういった取り組みを通じて、それらのフィールドを大事にしようとする地域の人たちの意識醸成、そしてそのフィールドで活躍したいという新たな人材の誘致へも発展させていく。

また、開発段階から新たな取り組みの様子や出来上がった新ツアーなどを「入谷の里山ねっと」を通じて発信していくことにより、来訪者の興味関心を引き付ける目的もある。入谷地区の農泊推進対策は、決して入谷地区の力のみで推進していくのではなく、町内外の入谷地区の活性化を願いアクションを起こすメンバーを大切にしつつ、常に前向きな企画検討を行う「場づくり」に力を入れ、情報発信に力を入れることで、町の観光協会やリピーターにも広告役を担ってもらうことによって実現させるものである。

② 人材育成も兼ねたグリーンツーリズム推進チームを確立

R4年度の実績でも紹介してきたグリーンツーリズムインストラクター・コーディネーター研修受講者たちを中心としたグリーンツーリズム推進チームを確立させる。若者や移住者が中心でも企画運営できる力を付けるための自立を促しつつ、地域の連携や協力なしには実現しない事業であるため、運営中心メンバーが研修受講者かつ協議会員とする。イベント時などは、サポートスタッフとしてメンバー以外からもアルバイトやボランティアを募り、追々このチームに巻き込んでいくことも想定する。

入谷地区全体の活動や動き、町の観光協会からの情報などに敏感に反応できるようにし、地域内のコミュニケーションを密に取りながら、これまでにはなかった視点の体験や新たな実証実験を重ねていく役割も担う。このチームから企画提案があっても、実現に向けては必ず自域連携が生まれるため、結果的に地域内のさまざまな役割を担う人々がコミュニケーションを取り、交流を深め、助け合うことや次世代育成をすることにつながる。インストラクターが技術を習うことで技術継承にもつながる可能性がある。

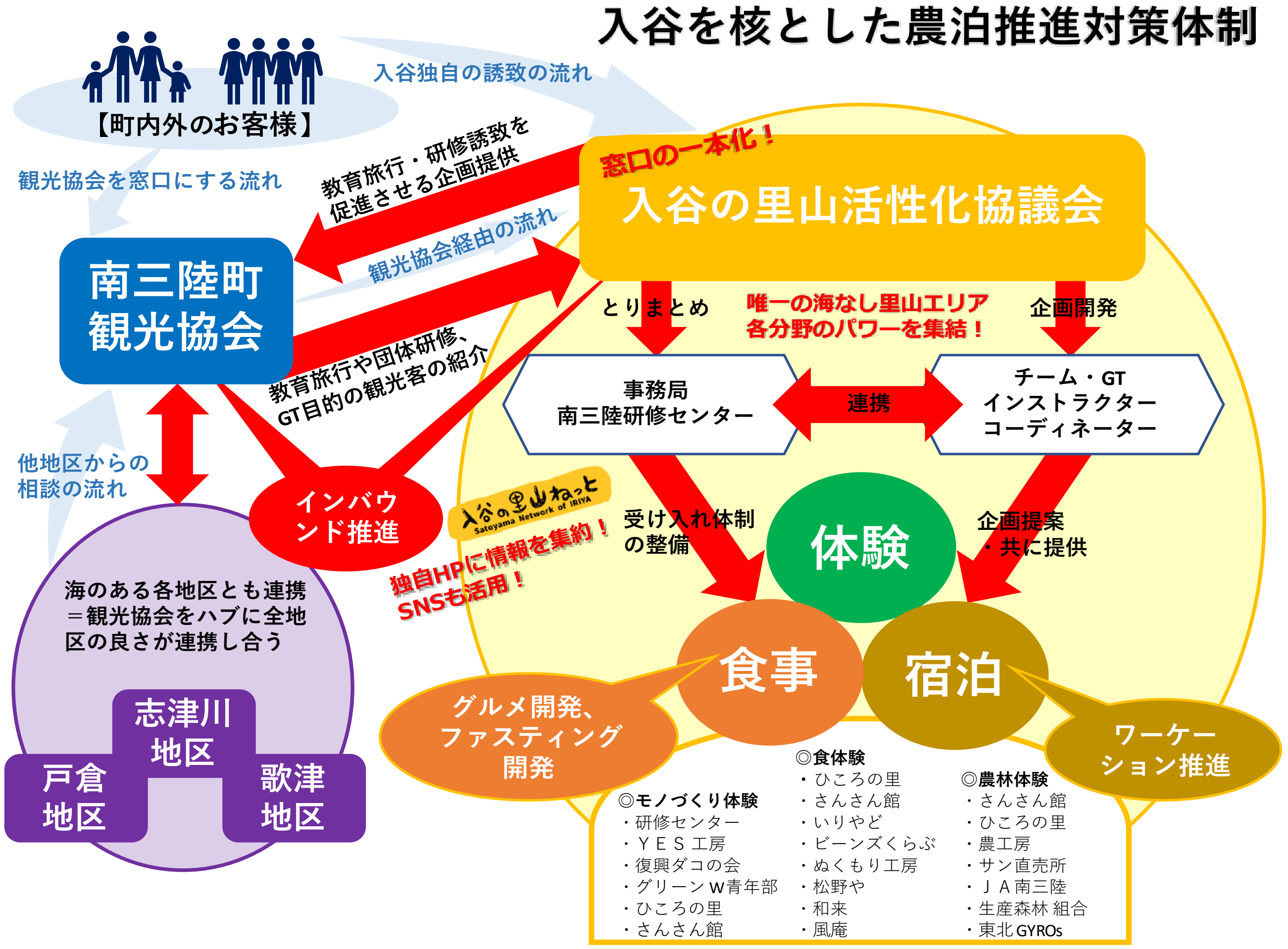
本協議会としては、地域の先輩たちと若手・移住者の架け橋となって、入谷地区の魅力開発の最先端チームへと育て、サポートしていくことにより、地域の賑わいの担い手としての人材育成も兼ねる。

☝協議会にて GT 研修生から提案の様子。

③ 南三陸町観光協会と連携した里山の価値化と窓口・情報・開発の一本化

①と②を踏まえ「入谷地区を核とした」農泊推進体制として、下記のように図式化した。
R3年度に設立した本協議会において、入谷地区の各拠点(施設)や飲食店、農家、工房等を取りまとめつつ、町の観光協会や他の機関との連携を図るための調整も行うこととし、その窓口を一本化する。教育旅行や大人数の団体旅行受入を積極的に行い、海を主として訪れようとしている来訪者を入谷地区にも引き込めるよう営業する。

各分野が個々に発信する情報を「入谷の里山ねっと」へ集約させることで情報の一本化も図り、なおかつ事務局役の「南三陸研修センター」が体験受入の交通整備を担うことで、スムーズな受け入れ体制を築く。ツアーや体験の開発・提供の推進は、本協議会に集まる情報やアイデアを基に、協議会に所属するグリーンツーリズムインストラクター・コーディネーターチームが主体となって進めていくことで、地域の人や資源やストーリーを上手に活用し、入谷地区から提供できる価値の整合性を図ることやストーリーのつながりを生み出すこととする。



(3)その他:魅力的なフィールドのツアーコース強化とフィールド発掘、地域拠点の活用

R4 年度に新たに山の神平地区と童子下地区のツアー開発を行ったが、他にも入谷地区内でツアー開発の可能性がある地区は存在する。例えば、歴史文化を感じられる地域拠点「ひころの里」周辺のエリアは、「押館館跡」「松倉館跡」などの歴史的跡地をめぐることができるエリアであるため、それらをつなぐルートの安全整備や林道整備などを地域で連携して取り組むことにより、また新たな目玉コースが生まれる可能性がある。

また、ツアーではなくても、今後増えていく耕作放棄地や空き地の課題が出てくるため、そういった情報を本協議会がきちんと把握し、農泊事業につながるフィールドとしての活用方法も検討していくこととする。

ツアーの際の発着点や食事休憩の拠点などに、「校舎の宿　さんさん館」「まなびの里　いりやど」「ひころの里」等の地域拠点も活用し、各種体験と絡めることで拠点施設の存在を知ってもらうことや足を踏み入れてもらうことにもつなげていくことを意識する。ツアーや体験に訪れた人に、「この拠点施設ではこんな体験も実施しています」と他のプランを紹介することで、また来てもらう理由をつくり、リピーター増加を目指す。

以上